

アドリアーナ・カヴァレーロの「コーラ」解釈

——母、身体、声をめぐって——

江川 空

はじめに

アドリアーナ・カヴァレーロ (Adriana Cavarero, 1947-) は、イタリアのフェミニスト哲学者である。プラトン研究者としてキャリアをスタートさせたのち、80年代にはヴェローナ大学にてフェミニスト・コミュニティ「ディオティマ」¹の創設にたずさわった。1990年に出版された著作『プラトンにもかかわらず——古代哲学における女性の形象——』²が国際的に高い評価を受けると、ロージ・ブライドッティ (Rosi Braidotti, 1954-) やジュディス・バトラー (Judith Butler, 1956-) らの支持を得て、その思想は現在、イタリア本国のみならず、世界各国で広く参照されつづけている。

カヴァレーロの思想は大きく分けてふたつの論点に代表される。ひとつは、フランスの現代思想家リュス・イリガライ (Luce Irigaray, 1930-) に影響を受けた「性的差異」[*differenza sessuale*]³ (NP p. 19) の思想である。前述した著作のなかで、カヴァ

1 「ディオティマ」は、1983年にイタリア・ヴェローナで設立された。カヴァレーロは、ルイーザ・ムラーロ (Luisa Muraro, 1957-) と並び、その創設者のひとりである。ここで、「ディオティマ」の思想的傾向を要約しておく、それは「伝統的な男性中心主義を批判し、哲学的言説のうちに存在している普遍性や中立性を糾弾することである」と言える（詳しくは、潮屋郁也「イタリア・フェミニズムにおける「母」をめぐる思想と実践—チェザーレ・カザリーノ、アンドレア・リーギ編『もう一人の「母」：ディオティマとイタリア・フェミニズムにおける象徴秩序』を読んで」、東京外国語大学海外事情研究所『Quadrante: クアドランテ: 四分儀: 地域・文化・位置のための総合雑誌』第22号所収、2020年、215-226頁を参照）。

2 Adriana Cavarero, *Nonostante Platone: Figure femminili nella filosofia antica*, Roma, Castelvechi, 2023. NP と略記。以下、訳文における角括弧は引用者による補足とする。

3 カヴァレーロによれば、「性的差異」とは「象徴的秩序と同時に生物学的所与を、身体の状態と同時に想像的なものの作用を、それらの分かちがたさを暗示しながら指し示す [indica sia il dato biologico che l'ordine simbolico, sia la morfologia corporea sia il lavoro dell'immaginario, alludendo alla loro inscindibilità]」言葉である (Adriana Cavarero, “Il pensiero femminista. Un approccio teoretico”, in Adriana Cavarero & Franco Restaino, *Le filosofie femministe*, Milano, Bruno Mondadori, 2009, p. 78)。カヴァレーロも含め、イタリアのフェミニストたちは、生物学的な性と社会的・文化的な性が分かちがたく結びついているという意識のもと、「セックス／ジェンダー」のカテゴリーよりもむしろ「性的差異」という用語を積極的に

レーロは西洋哲学史において「男性」が「中性的／普遍的な [neutro/universario]」主体と見なされ、「女性」がそうした「男性」の中心性から表象されてきたことに批判の目を向ける (*Ibid.*, p. 18)。カヴァレーロの目的は、これまで「他者の思考の対象 [oggetto]」 (*Ibid.*) として扱われてきた「女性」に「主体性 [soggettività]」を回復させることで、以上のような家父長制および男性中心主義を転覆させることにある。

もうひとつの論点は、政治哲学者ハンナ・アーレント (Hannah Arendt, 1906-1975) から受け継いだ「出生 [nascita]」 (*Ibid.*, p. 21) の概念である。アーレントを参照しつつ、カヴァレーロが述べているように、伝統的な家父長制はもっぱら「死 [morte]」のカテゴリーを中心に増長してきた (*Ibid.*, p. 22)。人間を「死すべきもの [i mortali]」 (*Ibid.*) として定義するような古代ギリシアの言説がその典型である。それに対して、カヴァレーロは「出生」を基本的なカテゴリーに据え、「生みだす性」としての女性の主体性、ないし生まれたばかりの幼児の依存性に着目することで、家父長制と同時に、西洋哲学史内で構築されてきた個人主義的思想を打ち砕こうとするのである。もちろん、ここでカヴァレーロは「女性がすべて子どもを生むべきである」とか、「子どもを生んでいない女性は本物の女性ではない」とか、そういう話をしているわけではない。そうではなくて、(とりあえず今のところ) それぞれの人間がひとりの母から生まれている以上、母の存在を、あるいは母との関係性を無視して人間を語ることはできないのではないかと彼女は主張しているのである。ここには、古代ギリシア哲学以来、「母の身体」という具体的な存在者を超越して、アイデアや神あるいは絶対者といった抽象的な起源の問題を思考してきた西洋哲学史に対する批判が込められている⁴。そして、

使用する傾向がある。ただ、そのなかでもカヴァレーロは「生物学的所与」に基づく「身体性」ないし身体の「物質性」が、あらゆるイメージや言語活動の基盤にあると考え、前者が後者を絶えず不安定にさせる点を強調しようとする。

- 4 カヴァレーロは、人間が「出生」に際して「新規性 [novità]」と「唯一性 [unicità]」を伴って現れるというアーレントの「出生」概念を高く評価しながらも、アーレントの思想に数々の批判を加えている。ファニー・セーデルベックの論文を参考にしつつ、カヴァレーロによる批判の要点をまとめるならば、次のようになるだろう。①アーレントが「出生」を考察するにあたり、母との関係をほとんど踏まえておらず、したがって「無からの到来 [un venire dall' mondo]」 (*NP*, p. 22) という古代ギリシアの思想を踏襲していること、②生まれてくる人間が性的に中性であるとみなされていること、③新生児における「非対称性」や「依存性」を考慮していないこと、④「幼児期 [infanzia]」のテーマを避けていること、以上の4つである (Adriana Cavarero, *Inclinazioni: Critica della rettitudine*, Milano, Raffaello Cortina, 2014, pp. 149-167; Fanny Söderbäck, "Nativity or Birth? Arendt and Cavarero on the Human Condition of Being Born", *Hypatia: A Journal of Feminist Philosophy*, vol.33, no. 2, 2018, pp. 273-288. doi:10.1111/hypa.12403)。ちなみに、アーレントとカヴァレーロの「出生」概念を踏まえ、「産まれる」という人間の「被産性」に注目した論文としては以下のようなものがある。仲井慧悟「被産性の

本論文がこれから扱う「コーラ [chora]」もまた、このような問題意識を前提にして論じられるのである。

カヴァレーロの「コーラ」解釈についてはこれまでも、たとえば、1995年に刊行された著作『形象のなかの身体——身体性の哲学と政治学——』⁵を中心に、「コーラ」がイメージに先行しながらも、絶えずそのイメージを不安定にさせる「身体性」として把握されていると主張する見解⁶や、あるいは2003年の著作『もっと多くの声に——音声表現の哲学——』⁷を参照しながら、アーレンティアン哲学者としてのカヴァレーロに注目し、同じくアーレントに影響を受けたジュリア・クリステヴァ (Julia Kristeva, 1941-) との関係からその解釈に言及する研究が存在してきた⁸。以上の研究はこれまでほとんど扱われてこなかったカヴァレーロの「コーラ」解釈について論じているという点で評価することができるものの、どちらも依拠している著作・視点ともに限定的であり、また、「コーラ」それ自体を主題にした論文ではないため、カヴァレーロの思想における「コーラ」解釈の位置づけについて十分に論じ切れているとはいえない。本論考では、カヴァレーロの思想において「コーラ」が、西洋哲学史における男性中心主義、視覚中心主義を批判するための賭け金になっているという広い視野のもと、『形象のなかの身体』、『もっと多くの声に』、そして最新の著作も考慮に入れ、その解釈に迫ってゆく。

以上より、第一章ではまず、ここで問題になっている「コーラ」とはそもそも何であるのかという点について、現代思想（とりわけバトラー）の議論を参考にしながら見てゆく。つづく節では、『形象のなかの身体』を読解することで、カヴァレーロの思想において「コーラ」が男性中心主義に対する批判という観点から捉えられ、とりわけ、そこで「母の身体」が強調されていることを指摘する。さらに第3節では、『もっと多くの声に』を参照し、視覚中心主義あるいは「ロゴスの無声化 [devocalizzazione del logos]」(APV p. 51) という文脈において、「コーラ」が「声 [voce]」の問題と

三相-人間にとって〈生まれる〉とはどういうことか-、『哲学の門：大学院生研究論集』第5号所収、2023年、19-23頁。

5 Adriana Cavarero, *Corpo in figure: Filosofia e politica della corporeità*, Milano, Feltrinelli, 2003. CFと略記。

6 Emma Ingala, “Imagining the Body: On the Power of Images and the Force of the Corporeal in Adriana Cavarero”, *Journal of Italian Philosophy*, eds., Federica Castelli, Marco Piasentier & Sara Raimondi, Vol. 7, 2024, pp. 54-77.

7 Adriana Cavarero, *A più voci: Filosofia dell'espressione vocale*, Roma, Castelvechi, 2022. 本論文ではAPVと略記。

8 Julian Honkasalo, “Cavarero as an Arendtian Feminist”, in *Political Bodies: Writings on Adriana Cavarero's Political Thought*, ed., Paula Landerreche Cardillo & Rachel Silverbloom, New York University press, 2024, pp. 37-55.

つなぎ合わされていることを確認する。さいごに、以上の考察を踏まえたうえで、カヴァレーロの「コーラ」解釈の可能性と限界を指摘してむすびとしたい。

1 「コーラ」とは何か

プラトンは『ティマイオス』⁹のなかで宇宙の成立について物語っている。かれがティマイオスに語らせているところによれば、この宇宙には「製作者[demiourgos]」¹⁰がおり、かれは三つの要素に基づいて宇宙をつくりあげたという。すなわち、その三つの要素とは、①つねに同一のまま保たれ、知性によって把握される宇宙の「形相[eidos]」¹¹、②形相のコピーであり、「感覚によって[met'aistheseos]」把握されるもの（＝生成するもの）¹²、③形相のコピーがそのなかで生成する「コーラ」¹³である。別の箇所、これらはさらに①父、②子、③母（受容器、乳母）の名で喩えられている¹⁴が、ここ

9 原文は John Burnet 版の *Platonis Opera IV*, Oxford, Clarendon Press, 1902 を参照し、訳書としてはプラトン『ティマイオス』、種山恭子＝訳、『プラトン全集 12 テイマイオス・クリティアス』所収、岩波書店、1975 年、74-84 頁／プラトン『ティマイオス』、土屋睦廣＝訳、講談社学術文庫、2024 年を参照した。上記の著作を引用するに際しては、原文：種山訳：土屋訳の順で表記する。なお、本論文では、原文ギリシア語はアルファベットで表記し、カヴァレーロの著作で引用されているものも含め、ラテン語・ギリシア語の長音は無視した。

10 この「製作者」(Platon 29A: 種山 29 頁：土屋 32 頁) はまた、「万有の作り主にして父」(Platon 28C: 種山 28 頁：土屋 32 頁) とも呼ばれているが、たとえば、ここで、キリスト教の「神」のような自立した「創造主」を想定することは不適当である。というのも、イタリアの現代思想家 マッシモ・カッチャーリ (Massimo Cacciari, 1944-) が述べているように、製作者が「モデル [Modello]」(つまり形相) を頼りに宇宙をつくったのだとすると、そこで製作者は「行為の自立した主体 [soggetto autonomo dell'agire]」ではなく、むしろ、モデルが「かれ [製作者]」を通して作用している [opera attraverso di lui] ために、モデルの媒介になっていることが理解されるからだ (Massimo Cacciari, *Dell'inizio*, Milano, Adelphi, 2008, p. 388. 以下、訳文における亀甲括弧内は引用者による補足とする)。この意味で、『ティマイオス』における「真の父」とは「モデル」ないし「形相」であると言うことができるかもしれない。

11 Platon 52A: 種山 83 頁：土屋 78 頁。

12 *Ibid.*: 同前 84 頁：同前。

13 *Ibid.*: 同前：同前。カヴァレーロが述べているように「コーラ」は「空間[spazio]」、「場[luogo]」、「広さ[ampiezza]」といった意味がある (CF p. 92)。ちなみに、種山も土屋も「場」と訳している (種山 84 頁：土屋 74 頁)。

14 Platon 50D: 種山 80 頁：土屋 74 頁。「コーラ」が「母」とともに、「乳母」(Platon 49A: 種山：土屋 71 頁)、「受容器」(*Ibid.*: 同前：同前) と呼ばれている理由のひとつは以下のようなものである。すなわち、「古代ギリシアでは、一般に、子の真の親、真の原因者は母親ではなく父親 (精子) であると考えられていた。母親は父親から精子を受け取り、それを養い育てるにすぎない」(土屋睦廣「訳者解説」、前掲書所収、254 頁)。

で重要なのは、三番目の要素である「コーラ」が他のふたつの要素に比べて不可解な地位に置かれているということだ。

前述したように、この宇宙にはまず、つねに同一のまま保たれた形相が存在している。それは変わることのない世界の形として生じることもなければ滅びることもない。ゆえに、感覚の働きによっては捉えられないものである。いっぽうで、わたしたちが実際に生きている物質的世界は感覚によって捉えられるため、知性によって把握される形相と感覚的＝物質的世界にはどうしても断絶ができてしまう。この断絶を埋めるために要請されるのがまさに「コーラ」である。「コーラ」は形相からそのコピーを受け取り、かつ物質化する「受容器」として働いているが、もし「コーラ」それ自体が何らかしらの形を持っていたり、あるいは、それが受け容れるものと同じような、ある一定の性質を持っていたりすると、たとえば、そうした性質とは反対の性質を持っているものを受け容れるときに、その生成を妨げてしまうことになりかねない。「コーラ」の特性はあくまでも形相から受け取られたコピーをそのまま生成させることにあるのであり、それゆえに、「形がないもの [amorphon]」として論じられなければならないのである¹⁵。

しかし、そうだとすると、「形がないもの」を一体どのようにして論じることができるのだろうか。プラトンの答えはこうだ。いわく、「コーラ」は感覚によっては把握することができないものとして、いわば「^{まが}擬いの推理によって [logismoi tini nothoi]」触れられるものであり、かろうじて信じることができるものなのだ¹⁶、と。このように「夢うつつの状態」¹⁷で語られる「コーラ」は、知性によっても感覚によっても十分に把握することができないという特異な性格のために、西洋哲学史（とりわけ現代思想）において様々な問題提起を誘発してきたのだった。

たとえば、フランスの現代思想家ジャック・デリダ（Jacques Derrida, 1930-2004）は、先に述べた「コーラ」の描写から、男性／女性、形相／物質（イデア／現象）といった二項対立の図式を絶えず動揺させる脱構築の力を引きだそうとする。すなわち、デリダにとって「コーラ」とは「第三のジャンルのうちに、それも、場なき場の中性的空間、すなわち、すべてがそこにおいてはしるしづけられるが、『それ自体においては』

15 「コーラ」が特定の形を持たないという議論については、Platon 50D-E: 種山 土屋 74-75 頁を参照。

16 *Ibid.*, 52A: 同前 84 頁 : 同前 78 頁。logismoi tini nothoi についてはさまざまな訳が存在する。カヴァレーロのイタリア語訳では「私生児の＝不純な＝雑種の言説[un discorso bastardo]」(CF p. 93)、種山訳では「^{まが}擬いの推理」(種山 84 頁)、土屋訳では「非摘出の理性」(土屋 78 頁)とされている。本論考では、訳語の分かりやすさを考慮して種山訳を採用する。

17 Platon 52A: 同前 : 同前。

しるしづけられることはあるまい、そんな一つの場合¹⁸」なのである。ゆえに、デリダからすれば、「コーラ」は決して「母なるもの」とも「女性的なもの」とも同一化することができない¹⁹。というのも、そのような仕方では「コーラ」を特定の形象と一致させてしまえば、「コーラ」の非-固有性は解消され、上述した脱構築の力も無効になってしまうからである。デリダが、女性名詞であるはずの「コーラ」に定冠詞 *la* を付けないことも以上のような理由による²⁰。

これに対して、バトラーはイリガライの著作『検鏡——他なる女性について——』（1974）に収められた論文「氷＝鏡の母 [une mère de glace]」を読解しながら、別の解釈を提示してゆく。バトラーによれば、イリガライは「コーラ」が「女性的なもの」の形象に同一化されえないというデリダの議論に同意しているように見えつつも、分析を「さらに一歩 [a step further]」進めているという²¹。いわく、「[イリガライにとって] 女性的なものは、ちょうど受容器がそうであるようにその形象化を超えており、この主題化不可能性は、主題化、形象化され得るものの不可能だが必要な基礎として、女性的なものを構築するのだ」²²、と。バトラーの理解に従えば、イリガライが当該論

18 ジャック・デリダ『コーラ プラトンの場』守中高明＝訳、未來社、2004年、51頁。

19 デリダは「コーラ」と「女性的なもの」を関係づける可能性を完全に否定しているわけではない。しかし、その語り口は曖昧である。いわく、「受容器という価値は、受動的で処女なる素材として、女性的エレメントに結びついていものではなかろうか——それも、まさしくギリシア文化におけるそれに？これらの異論は、価値のないものではない。けれども、コーラが、固有名詞としての語のある種の性質を確かに示しているとしても[……]、この指向の指向対象は、しかしながら、実在しない」（同前、26頁。引用文中、中略は引用者による）。

20 ところで、イタリアの現代思想家であるジョルジョ・アガンベン（Giorgio Agamben, 1942-）は、『ティマイオス』において問題になっているのが「コーラのうちでアイデアと感覚的なものとを同時に担っているパラダイム性 [paradigmaticità] であり、知的なものが感覚麻痺 [anesthesia] によって触れられ、感覚的なものが擬いの推理によって思考されうるような純粋な媒介性 [pura medialità]」ないし「純粋な認識可能性 [pura conoscibilità]」であると主張している（Giorgio Agamben, *L'irrealizzabile: Per una politica dell'ontologia*, Torino: Einaudi, 2022, p. 113）。すなわち、アガンベンにとって「コーラ」とは「知的なもの」と「感覚的なもの」がそのなかで同時に認識されることを可能にするような、まさしく、認識の「純粋な潜勢力 [pura potenza]」なのである（*Ibid.*, p. 107）。アガンベンが議論の要点を脱構築の力よりもむしろ、世界の認識可能性に置くことで、デリダとは立場を異にしているようにも見えるが、認識を成立させるものとして必然的に要請される「コーラ」が『ティマイオス』のなかで同時に「女性的なもの」として語られていることに対してはさほど関心を持っていないようだ。

21 Judith Butler, *Bodies that Matter: on the discursive limits of "sex"*, New York&London, Routledge, 1993, p. 41. [ジュディス・バトラー『問題＝物質となる身体——「セックス」の言説的境界について——』佐藤嘉幸＝監訳／竹村和子・越智博美＝訳、以文社、2021年、57頁。]

22 *Ibid.* [同前。]

文のなかで主張しているのは、「コーラ」あるいは「受容器」という名で言い表される「女性の身体」が、たんに男性／女性、形相／物質という二項対立から排除されているだけではなく、それ自体は「形相」でも「物質」でもないものとして外部に棄却されることで、以上のような二文法を可能にする「女性的なもの」を構築しているということである。それゆえ、二文法において捕捉される「女性」はあくまでも、「男性」の中心性から表象されたかぎりでの「女性」であり、そこで「女性の身体」が有している「生殖＝再生産」の能力は「男性」によって奪われ、「男性」は「理性＝言語活動」（ロゴス）を持つ主体として絶対的な自己生成を繰り返す「ファルス（男根）＝ロゴス中心主義的な構成原理 [phallogocentric economy]」²³ を作動させるのだ。

イリガライによる以上の論点を踏まえ、バトラーはさらに議論を前へと進めてゆく。プラトンのテキストに立ち返りながら、バトラーが主張するところによれば、「受容器」としての「コーラ」が、そのなかに侵入してくるどのような形も「引き受けること＝身に帯びること [assume]」²⁴ が決してないのだとすれば、そこで「コーラ」すなわち「女性的なもの」は「男性」によってつねに「貫通される [penetrated]」²⁵ ものでなければならないということになる。そして、このことは裏を返してみると、「男性」が決して「貫通される」ことのない「貫通不可能な貫通者 [impenetrable penetrator]」²⁶ として存在しつづけることを意味しており、したがって、「ファルス＝ロゴス中心主義」は「男性」と「女性」をこのように「貫通するもの」と「貫通されるもの」として安定化させる「異性愛的マトリックス [heterosexual matrix]」²⁷ もまた作動させていることが理解されるのである。それゆえ、バトラーによれば、ここで排除されているのはたんに「女性的なもの」だけではない。男性が男性を、女性が女性を「貫通する」ことが禁じられているという点で、そこではまた「同性愛的セクシュリティ」も排除されているのである。ここから、バトラーは「レズビアン・ファルス」、すなわち「貫通するもの」としての「女性の同性愛的主体」に議論の場を移してゆくことで、こうした「異性愛的マトリックス」にパニックを引き起こす可能性を探ろうとするのである。

しかし、このようにしてバトラーが「同性愛的主体」に「貫通」の資格を与えようとするとき、見過ごされているのは、「それでは、『ファルス＝ロゴス中心主義』によって『生殖＝再生産』の能力を奪われた『女性』が主体的に、この能力を『引き受ける』場合はどうなるのか」という問いである。カヴァレーロの関心はまさしく、この点に属している。以上を踏まえたうえで、次節ではいよいよカヴァレーロの「コーラ」解釈に迫っ

23 *Ibid.*, p. 42. [同前、53 頁。]

24 *Ibid.*, p. 50. [同前、69 頁。]

25 *Ibid.* [同前、70 頁。]

26 *Ibid.* [同前。]

27 *Ibid.*, p. 51. [同前。]

てゆくでしょう²⁸。

2 カヴァレーロの「コーラ」解釈

1995年に出版された著作『形象のなかの身体』において、カヴァレーロは自著が執筆されるに至った背景を次のように説明している。「要約して言ってしまうと、問題になっているのは、政治がみずからの基本的なカテゴリーから身体〔corpo〕を排除しておきながら、他方で、何千年ものあいだ、身体の変換のうえに、政治的秩序そのものを形づくろうとしていることである」(CF, p. 7)。カヴァレーロによれば、西洋哲学史において身体は、政治的秩序が構築されるために必要不可欠な構成要素として変換のうちに描写されながら、他方、その物質性は政治的カテゴリーの領域からは排除されてきたという。そして、カヴァレーロがソフォクレスの『アンティゴネー』、あるいはシェイクスピアの『ハムレット』を通して導き出すのは、そのようにして排除される「身体」がとりもなおさず「女性の身体」であったということだ。ここから、カヴァレーロは西洋哲学が変換として形象化しようとするも、そうした形象化を絶えず不安定にさせる力を有するものとして身体の物質性を論じてゆく。本論考で主題になる「コーラ」もまた、こうした議論の途上で言及されるのである。

さて、第二章「プラトン」においてカヴァレーロはまず、『ティマイオス』における「コーラ」描写の基本的特徴を論じたのち、その論点を以下のように記述する。いわく、「コーラ」が提起している問題は「ロゴスがみずからの境界の外に追いやったものの紛れもない存在に遭遇し、ゆえに、ロゴスが形相の王国をみずからに確保しているかぎり、それを形なきものと宣言しなければならない運命にあるという、偏見に満ちた自給自足のうちに刻まれている」(Ibid., p. 93)、と。バトラーと同じように、ここでは男性原理を代表するロゴスの絶対的な自己生成が問題にされているいっぽう、バトラーとは異なる視点から「コーラ」が論じられていることに注意しておこう。そもそも、『ティマイオス』において「コーラ」ないし「受容器」は初めから登場してくる言葉ではなかった。プラトンは、世界の統一体としての「形相(父)」と「物質的世界(子)」について論じたのち、そこで生じる断絶を埋めるために必然的に要請される存在として「コーラ

28 ちなみに、エリザベス・グロス(Elizabeth Grosz, 1952-)は、バトラーと同じようにデリダとイリガライを参照しつつ、「女性的なもの」と「空間性〔spatiality〕」および「住居〔dwelling〕」との関係に注目して、「建築の《概念》そのもの〔the very concept of architecture〕」が「女性ないし女性性の男根ロゴス中心主義的な消去」や「女性の特殊性、あるいは女性の身体的かつ概念的な自律や社会的価値に対する文化的拒否」と結びついてきたことを、「コーラ」を論じながら主張している(Elizabeth Grosz, *Space, Time, and Perversion: Essays on the Politics of Bodies*, New York & London, Routledge, pp. 111-124)。

(母)」を語るのである。ただ、形相に対して純粋な思考の領域を分け与えてしまった以上、プラトンは「コーラ」を合理的な仕方では語りえないものとして、しかし語りつづけなければならない。このことが意味しているのはつまり、「どんなに男性が、残留物や重荷を持つことなく、思考の純粋な形式と一致するために、そこから自分自身を引き離そうと夢見るとしても、実際のところ、明らかに母から、その肉体はロゴスを持つ動物 [zoon logon echon] に到来する」ということであり、そのようにして、『ティマイオス』の物語全体において、プラトンの言説を妨げているのは、母に根源を持つ身体 [un corpo di materna radice] である」ということだ (*Ibid.*, p. 95)。すなわち、カヴァレーロの言葉に従えば、プラトンの『ティマイオス』が描写しているのは「出生 [nascita]」(*Ibid.*) の場面であり、そこで排除-包含されているのは、プラトン自身がそこから生まれたはずの「母の身体」なのである。

しかし、ここでひとつの疑問が生じてくることは想像に難くない。すなわち、バトラーの議論を踏まえれば、このように「コーラ」と「母の身体」を同一化することは「女性的なもの」を「生殖=再生産」として論じてしまうことで、「ファルス=ロゴス中心主義」を強化することにつながってしまうのではないだろうか、と。この点に関して、カヴァレーロはイリガライを読解しながら、「母の身体」が持つ「破壊的潜勢力 [una potenzialità eversiva]」を強調する (*Ibid.*, p. 96)。カヴァレーロによれば、イリガライが問題にしていたのは「女性的なもの」がファルス=ロゴス中心主義の前提になっているのと同時に、ロゴスの領域に対して「根本的な他性 [un'alterità radicale]」(*Ibid.*) として残りつづけるということであり、だからこそ、それはロゴスの領域を攪乱させる可能性を持ちうるのである²⁹。そして、イリガライに倣いつつ、そうした「女性的なもの」が何よりもまず「女性の生成力」であるとするカヴァレーロにとって、「ファルス=ロゴス中心主義」は、バトラーのように「レズビアン・ファルス」を主張する以前に「母の身体」によって、その機構が不安定化される危険に絶えず面していることになるのだ。

29『問題=物質となる身体』のイタリア語版に収められた序文(1996)のなかでカヴァレーロは、イリガライの読解に基づいたバトラーの試みを、「コーラ」の議論のうちに現れる「異性愛的マトリックス」を指摘しながら、「コーラ」にそうした「異性愛的マトリックス」を不安定にさせる潜勢力を見いだすものであるとして積極的に評価している(Adriana Cavarero, "Prefazione all' edizione italiana", in Judith Butler, *Corpi che contano: I limiti discorsivi del "sesso"*, traduzione di Simona Capelli e Chiara Fioravanti, Roma, Castelvecchi, 2023, pp. 10-11)。ただ、カヴァレーロはそのうえで、バトラーとは別の仕方ではイリガライを解釈しようとする。いわく、「イリガライは『検鏡』のなかで、『ティマイオス』に対する複雑な批判的読解を企てている[.....]。わたしの分析は明確に、この解釈との、そしてバトラー(『問題=物質となる身体』)がフォーコー的かつデリダ的な解釈の次元に導き、そのうえ装置の異性愛的つまりは貫通的[penetrativo]パラダイムを指摘している、イリガライの主張の本来の議論との対話を試みようとするものである」、と(CF p. 96)。

いっぽう、「根本的な他性」や「根源」という言葉からも分かるように、カヴァレーロはここで明らかに、「母の身体」をロゴス（すなわち言語）には決して汲み尽くされることのない「絶対的な外部」と見なそうとしている。ただ、バトラーも述べているように、身体をそのように「絶対的な外部」として措定することは、身体に対して働きかける言語の力を軽視しているようにも思われる。というのも、わたしたちが「母の身体」について語るときでさえ、それはつねに言語を通して行われるわけであり、したがって言語に全く還元されることのない身体などというものを考えることは極めて難しいからだ。

もちろん、だからと言って、バトラーが身体の物質性を軽んじているのかと言うと、そういうわけでもない。実際、バトラーは『問題＝物質となる身体』のなかで次のように述べているからだ。

言語 [language] と物質性 [materiality] は、互いに完全に組み込まれ合ったものであり、それらの相互依存のなかで交差をなしているが、完全に折り重なりあう、つまり互いに還元されるものでは決してなく、それでいて、一方が他方を完全に超えるものでもない。言語と物質性は、常にすでに互いに含み込み合うと同時に、常にすでに互いを超えるものであり、決して完全に同一のものでも完全に異なったものでもない。³⁰

バトラーがここで主張しているのは、物質性は確かに存在しているが、それはつねに言語とともに現れるということであり、それゆえ言語との関係を無視して物質性を語ることは不可能であるということだ。ここから、バトラーはつづく文章において、言語が物質性に対する認識を作り出す過程を、いいかえれば、言語が物質性に対して過剰に働く地点を記述しようとするのである。ただ、バトラー自身が述べているように、言語と物質性が互いに還元不可能であり、決して完全に同一のものでも完全に異なったものでもないとすれば、言語が物質性よりも過剰に働く地点が存在しているのと同時に、物質性が言語よりも過剰に働く地点もまた必然的に存在するということにはならないだろうか。もちろん、この関係は「絶対的なもの」ではなく、あくまでも「相対的なもの」でしかないのだが、バトラーは後者の問題を（少なくとも 90 年代の段階では）十分に論じ切れてはいない³¹。

30 Butler 1993, p. 69. [前掲書、93 頁。]

31 9・11 以後、およびカヴァレーロの思想を積極的に取り込み始める 2000 年代以降のバトラーは、私たちの身体がどうしてもなく他者に「曝されている」という視座のもと、身体が持つ「可傷性 [vulnerability]」を強調するようになる (Judith Butler, *Prekarious Life: The Powers of Mourning and Violence*, London & New York: Verso, 2004; Butler, *Giving an account of*

であるとすれば、バトラーの思想と対比させるかたちで、カヴァレーロの試みを物質性が言語に対して過剰に働いている地点を見定める行為として積極的に定義することもまた可能であるように思われる。そして、このような地点は、カヴァレーロにとってまさに「母の身体」として論じられるのであり、それは、言語と関わり合いつつも、言語には完全に還元されることなく、言語と拮抗しつづけるのである。

この点を理解するために、2024 年に出版された著作『狼の子どもに乳を飲ませる女性たち——超母性のアイコン——』³²を見てみよう。本書のなかでカヴァレーロは、イタリアの小説家エレナ・フェッランテ（Elena Ferrante, 1943-）やポルトガルの同じく小説家であるクラリス・リスペクトル（Clarice Lispector, 1920-1977）の言葉を頼りに「母の身体」の経験について語ってゆく。そこで、カヴァレーロが強調するのは、そのような経験が「語りうるものの限界 [limite del dicibile]」（*DA* p. 7）として、すなわち「並外れたもの＝不気味なもの [il tremendo]」（*Ibid.*）ものとして現れるということである。カヴァレーロによれば、「母性 [maternità]」が並外れている＝不気味であるのは何よりもまず、それが、みずからの身体のうちで生じている無限の生の非人称的過程 [processo impersonale della vita infinita] に身をさらしながら、具体的な唯一性 [unicità incarnata]、つまり生という特異な有機体の定まった形式をもたらす（*Ibid.*, p. 9）ことに依っている。すなわち、「母の身体」は、生を無限に連鎖させてゆくという「自然 [pysis]」の非人称的過程に参加しながらも、それと同時に、みずからの身体から、たったひとつの特異な他の身体を生み出すという点で、「並外れた＝不気味な」ものなのである。それゆえに、「母の身体」の経験は「特異な生きものと無限の生との閾 [soglia]」（*Ibid.*, p. 12）に位置するものとして、言語では、とりわけ伝統的な哲学の概念では語り尽くすことができないものとして現れる。というのも、冒頭でも述べたとおり、西洋の伝統的な哲学は「起源」を考える際に、絶対者や神など、抽象的な概念に関心を向けつづけるあまり、「母の身体」の経験を無視し、それを思考しようとする努力を怠ってきたからである。そのため、カヴァレーロは、前述したフェッランテやリスペクトル、あるいはフランスの小説家であるアニー・エルノー（Annie Ernaux, 1940-）、スペインの思想家であるマリア・サンブラーノ（María Zambrano, 1904-1991）といった女性の著作家たちの言葉を引き合いに出すことで、この

Oneself, Fordham University Press, 2005; Butler, *Notes Toward a Performative Theory of Assembly*, Harvard University Press, 2015)。バトラーはここで、身体の物質性が言語を攪乱させてしまうような「不安定さ」や「どうしようもなさ」を持つことを以前にも増して主張しているようにも見える。バトラーとカヴァレーロ、両者の思想的な影響関係については、また別の機会に論じることしよう。

32 Adriana Cavarero, *Donne che allattano cuccioli di lupo: Icone dell'ipermaterno*, Roma, Castelvocchi, 2024. *DA* と略記。

経験を語ろうとするのだ。

以上のように、「母の身体」の経験を主体的に語ることで、身体の物質性が言語に対して過剰に現れてくる地点を見いだそうとする試みに加えて、カヴァレーロの思想には、「母の身体」から生まれてきた「幼児」の経験に、より具体的に言えば、その依存の経験に着目することで、身体の物質性が持つ余剰を探ろうとする試みもまた存在している。これまでに論じてきた「コーラ」の議論と関係しながら、そうした試みが明確に現れてくるのが、次節で扱う「声」の問題である。

3 「コーラ」と「声」

カヴァレーロは2003年に出版された著作『もっと多くの声に』のなかで、プラトンから始まる西洋哲学の伝統が「見ること [idein]」や「観照 [theoria]」に重きを置く視覚中心主義を発展させてきたことを指摘し、そうした西洋哲学史の歩みを「ロゴスの無声化」(APV., p. 51)として批判的に考察している。彼女によれば、西洋哲学における思考のモデルとは「魂による魂それ自身との沈黙の対話 [il dialogo silenzioso dell'anima con se stessa]」(Ibid., p. 58)であり、そこでは実際に口から発せられる「声」の経験は排除されてきたという。たとえば、アリストテレスは人間を「ロゴスを持つ生きもの [vivente che ha logos]」として定義しているが、そこでロゴスとは何よりもまず、「意味している声 [phone semantike]」(Ibid., p. 43)であった。この概念で重きが置かれているのは「声」の方ではなく、「意味している」という部分であり、むしろ声の物質性や身体性は、純粋な意味の伝達を阻害してしまうことから、ロゴスが生起するために必要とされながらも排除されてきたのである。『形象のなかの身体』ですでに現れていたような身ぶりを繰り返しながら、カヴァレーロはそうようにして排除される「声」が何よりもまず「女性の声」でもあったことを指摘し、それまでの議論を「コーラ」の問題と繋ぎ合わせる。ここで彼女が参照してくるのが、ジュリア・クリステヴァによって提唱された「コーラ・セミオティック [la chora sémiotique]」³³である。

3部にも渡る長大な著作『詩的言語の革命』(1974)において、クリステヴァは人間主体が意味を生成するプロセスを詳細に分析している。彼女はまず、意味生成のプロセス [le procès de la signifiante] を「原記号態 [le sémiotique]」と「象徴記号態 [le symbolique]」のふたつに分け、それらによる相互的作用として言語活動を

33 Julia Kristeva, *La Révolution du langage poétique: l'avant-garde à la fin du XIXe siècle, Lautréamont et Mallarmé*, Paris, Seuil, 1974, p. 27. (『詩的言語の革命 第一部 理論的前提』原田邦夫=訳、勁草書房、1991年、18頁。)

捉える³⁴。これらのうち、前述した「コーラ・セミオティック」はもっぱら前者に属し、クリステヴァの説明によれば、それは「激しく変化しながらも枠をはめられている動性 [motilité] のなかで、欲動 [pulsions] とその鬱滞 [stases] から形成される、表現的ではない全体性³⁵」を指しているとされる。すなわち、「コーラ・セミオティック」とは精神分析で言うところの無意識の領域であり、そこではいまだ意味には至ることのない欲動が場を支配しているのである。言語活動は、こうした無意識的かつ身体的な欲動を象徴記号態が秩序づけることで成立する。したがって、「コーラ・セミオティック」は言語活動が生じるために必要不可欠な前提になっていながらも、言語活動には完全に汲み尽くされることのない欲動の余剰として存在しつづけるのである。カヴァレーロが述べているように、クリステヴァがプラトンの「コーラ」に魅了されているのは、それがプラトン自身の言説を成立させるために必要不可欠でありながらも、十分に概念化することができないという点に属している。ここでは、前節までに論じた「コーラ」の二重性が再び問題にされていることが理解されるだろう。

以上の議論を踏まえて、カヴァレーロがクリステヴァの思想に注目するのは以下のふたつの点である。ひとつは、クリステヴァが「コーラ・セミオティック」を「母と子」が「想像的に」融合した状態として論じていること、もうひとつはそのようにして「コーラ・セミオティック」を支配している欲動のリズムが「音声的なもの」として言及されていることだ。順を追って説明してゆこう。まず、クリステヴァにおいて象徴記号態に参入されるまえの人間の状態は、言語活動が芽生えるまえの状態として、すなわち幼児の段階に相当するとされる。この段階は先ほども述べたように、母と子が「想像的に」融合しながら、無意識的な欲動に支配されている場であり、そうした欲動の渦は「動性」として一定のリズムを刻んでいるという。クリステヴァはこのリズムを「声あるいは身ぶりのリズム [le rythme vocal ou kinésique]」³⁶に比し、とりわけ幼児の自由な発声や詩的なテキストのうちにその現れを見てとる。いわく、「声のような物質的媒体 [un support matériel comme la voix] を使って、このセミオティックの網は文芸のなかに『音楽 [musique]』をもたらすのだ」³⁷、と。ここから、カヴァレーロはクリステヴァによって想定されている無意識的欲動が「リズムを伴う音声的欲動 [l'impulso ritmico vocale]」(Ibid., p. 160)であると論じ、そこに、言語活動を攪乱させる可能性を見いだそうとするのである³⁸。カヴァレーロの言葉を見てみよう。

34 Ibid., p. 22. [同前、13 頁。]

35 Ibid., p. 23. [同前、15 頁。]

36 Ibid., p. 24. [同前、16 頁。]

37 Ibid., p. 62. [同前、60 頁。]

38 ただ、カヴァレーロはクリステヴァを手放しで受け入れているわけではない。2021 年に行われたインタビューでカヴァレーロは次のように述べている。「わたしは、母と子のあいだにある区別

声の発出には、意味の秩序が搾取し、それと同時に限界づけ、しかしながら管理しようと努力する音楽的享楽 [godimento musicale] が存在している。言葉によるコミュニケーションよりもさらに遡り、音素の欲動的基盤は、乳を飲む際に起こるリズムの快楽と同じく、口腔内で作用し、無限の享楽は簡単に忘れ去られることはない。観念の非物質的な世界に住もうとする思考とは反対に、言説 [discorso] とはつねに身体の問題であり、その身体は必然的に、血が通い、脈打ち、欲し、開かれた身体である。(Ibid., p. 161)

前述したように、クリステヴァの「コーラ・セミオティック」は「母と子」が「想像的に」融合した状態を指しており、そこで幼児は、たとえば乳を飲む際に感じるリズムによって代表されるように、無限の享楽によって満たされている。この享楽は、象徴記号態によって融合状態が引き離され、幼児が自立した主体として確立されたのちも、その言語活動のなかに痕跡として残りつづけることになる。それゆえ、こうした享楽がまったく存在していない言語活動などは存在しえないし、わたしたちが歌や詩に触れるたびに、この享楽は何度も立ち現れてくるのである。クリステヴァ、あるいはカヴァレーロの目的は、こうした「コーラ・セミオティック」の痕跡を増大させる詩的言語の実践を強調することで、象徴記号態が支配する固定化された言語活動を再編成することにあるのだ。

いっぽうで、先の引用でも明確に示されているように、カヴァレーロがクリステヴァよりも強調しているのは、声を持つ物質性ないし身体性である。本節の冒頭でも述べたとおり、西洋哲学の伝統において「声」は「意味」に奉仕するものとしてつねに否定的な仕方で位置づけられてきた。プラトン以来の哲学にせよ、近代言語学にせよ、声はもっぱら言語活動にとって必要不可欠な構成要素として語られるだけであり、そこで重視されてきたのはつねに意味によるコミュニケーションであった。ゆえに、ここでは「話している主体」に固有の身体は現れてこない。たとえ声の問題にされとしても、その声はどこから出てきたのかよくわからない抽象概念として扱われる。しかし、言うまでもなく、だれかが声を発出するためには神経、肺、筋肉、喉、そして、それ

のない場所としてのコーラにはこだわっていませんし、精神分析に煩わされることもありません。コーラはむしろ、語ることの意味論的次元に属していない、音声的かつ身体的で、リズムを伴う、生の感情的な潜勢力 [potenza] なのです。それは、言語を支え、養い、しかしながら超過するのです」(“Adriana Cavarero: raccontare e pensare”, a cura di Ivana Margarese, Marzo 17, 2021. Morel, voci dall’isola, <https://www.vocidallisola.it/2021/03/17/adriana-cavarero-raccontare-e-pensare/> [2025年2月11日最終閲覧])。以上の言葉から、近年のカヴァレーロは、母と子の依存関係を問題にしながらも、それが「想像的な」融合状態を指し示すというクリステヴァの精神分析理論に対しては一定の距離を置いていることが分かる。

らによってつくりだされる息や呼吸といった身体の総合的な運動を欠かすことはできない。主体はそれらの力を口腔内で結集させることではじめて「声」を発することができる。したがって、声はただ意味を伴うだけではなく、それを発した人間の身体の「唯一性 [unicità]」もまた表現するのである。しかも、この「唯一性」は、それが届く他者の耳と直接的に関係するために、他者との身体的かつ物質的な関係をつくりだしているのだ。カヴァレーロが「音声の発出の关系的唯一性 [unicità relazionale di un'emissione fonica]」(Ibid., p. 21) について語るとき、意図しているのはまさに、このような現象なのである。以上から、「コーラ」と「声」を結びつける議論においては「母と子」の依存的関係、あるいは身体の物質性に基づく関係性の創出を前面に押し出すことで、自立した男性的主体の自己生成を演じる「ファルス＝ロゴス中心主義」への批判が目指されていることが理解される。

おわりに

本論考ではまず、プラトンの『ティマイオス』を読解することで、「コーラ」の基本的描写を確認した。それによれば、「コーラ」とは宇宙の成立を語る際に要請されてくるものであり、知的形相（父）と物質的＝感覚的世界（子）の断絶を埋めるものとして、「母」や「乳母」といった「女性的なもの」の比喻によって語られる。しかし、「コーラ」それ自体は形相のコピーを何の抵抗もなく受け入れなければならないために「不定形」であるとされ、それゆえに合理的な仕方では語りえないものとして、西洋哲学史のうちでさまざまな問題提起を誘発してきたのだった。こうした問題提起のなかでも、本論考ではとりわけ現代思想の議論を取り上げ、「コーラ」が従来の哲学的な二項対立を不安定にさせる脱構築の力を担っているという主張（デリダ）、あるいは「コーラ」が「ファルス＝ロゴス中心主義」を作動させながら、それに汲み尽くされることのない外部を象徴しているという主張（イリガライ）、または「コーラ」がそうした「ファルス＝ロゴス中心主義」ないし「異性愛的マトリックス」を成立させる基盤になっているのと同時に、「コーラ」の名のもとで抑圧されているのはまた「同性愛的主体」でもあるという主張（バトラー）をそれぞれ検討してきた。

そして、本論考は以上の議論を踏まえ、カヴァレーロの「コーラ」解釈の特徴を、「コーラ」と「母の身体」を同一視し、「母の身体」の経験を主体的に語ることで、「ファルス＝ロゴス中心主義」には回収されえないような外部を強調することにあるという点を示した。しかし同時に、本論考は、バトラーの思想を通してカヴァレーロを読解することで、そのような外部が決して絶対的なものではなく、あくまでも相対的なものであることを指摘し、カヴァレーロの思想を身体の物質性が言語よりも過剰に働く地点を見定めようとする試みとして積極的に評価するに至った。

さいごに、第三節では、カヴァレーロによるクリステヴァの読解を頼りに、母と子の関係性および声の身体性・物質性に着目して「コーラ」と「声」の問題を論じ、そこから、カヴァレーロが、自立した男性的主体の自己生成、および純粋に意味だけを伝達しようとするロゴスの機能を攪乱させる可能性を「コーラ」のうちに見ていることが明らかになった。以上より、カヴァレーロにおいて「コーラ」は、西洋哲学がこれまでに発展させてきた視覚中心主義（「ロゴスの無声化」）ないし男性中心主義（「ファルス＝ロゴス中心主義」）を同時に批判する可能性を持ちうるものとして、いわば彼女の思想の賭け金になっていることが理解されるだろう。

他方、カヴァレーロの声の議論には批判の余地があることもまた事実である。それが際立って現れてくるのは、著作『もっと多くの声に』のなかで論じられる「声の異性装 [un travestimento vocalico]」の問題だ。カヴァレーロは第二部の第三章「メロドラマの声」において、西洋のメロドラマあるいは「ドラッグ [drag]」を分析することで、そこに「声の異性装」という現象が頻繁に現れていることを指摘する (*Ibid.*, pp. 156-157)。とりわけ彼女が注目しているのは、思春期の男子が声変わりの前に去勢されることで、高音の声（「白い声 [voce bianca]」）を保つようにした「カストラート」と呼ばれる歌手である。カヴァレーロによれば、「カストラート」は「歌の女性的原理 [principio femminile del canto] に捧げられている」 (*Ibid.*, p. 157) 存在であり、そのような「声の異性装、すなわち声を発する者の性的同一性との不一致は、抵抗しがたい享樂の源泉を明らかにする」 (*Ibid.*) という。この「享樂の源泉」とはすなわち、「母の身体」であり、カヴァレーロは「ドラッグ」であれ、「カストラート」であれ、かれらを生み出す者たちが「母の身体」において経験した「享樂」にどうしようもなく魅了されるためにそれを表現しようとするのだ、と指摘する³⁹。しかし、そうであるとするならば、わたしたちが、あるいはトランスの男性たちが、または男性装をする女性たちが、男性的な低い声にもまた魅了されるという事実をどのように説明すればよいのだろうか。この点について、カヴァレーロの議論にはいまだ不十分な点があると言わざるをえない。彼女が述べているように、わたしたちの声のひとつひとつ

39 ただ、バトラーも述べているように、「意味作用の発生における母の身体の原初性という仮定には明らかに疑問が残る」 (Butler 1993, p. 71 [前掲書、95 頁])。というのも、「主体形成に先立つ母の身体は常に、定義上その仮説的光景より後に来る主体によってのみ認知される」 (*Ibid.*) からである。いっぽうで、人間が「母の身体」から生まれている以上、それに対する言及を意図的に（たとえ戦略的にはあれ）避けることにもまた疑問が残る。なぜなら、そのような身ぶりは、西洋哲学における「母の身体」の排除-包含を繰り返す可能性があるからだ。しかし、「母の身体」の経験を論じること（カヴァレーロ）と、その他の可能な身体の経験について論じること（バトラー）は、「ファルス＝ロゴス中心主義」に対する批判という観点から言えば、決して矛盾する試みではない。

が、取り替えのきかないたったひとつの身体の実現であるとすれば、この世界に「もっと多くの声」を響かせるために、わたしたちはカヴァレーロをこえて考察を進めなければならないだろう。

*訳文について、既訳があるものは参照し、それを基本的に使用している場合もあるが、一部変更をしている箇所もあることをお断りしておく。

*本論文は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム A94241100045 の支援を受けた研究成果の一部である。